

〈重要な実践的事業と小児病〉

三つのインタナショナルの会議への参加についてのコミンテルン執行委員会第一回拡大総会の決議案にたいする意見をふくむロシア共産党(ボ)中央委員会政治局員への手紙*

同志モロトフへ
(政治局員のために)

計画中の世界のすべての労働者党の会議にコミンテルンが参加する問題について、ジノヴィエフから送ってきた決議案につきの変更をくわえるよう提案する。…………

私の提案するいちばん主要な変更点は、第二および第二半インタナショナルの指導者たちを世界ブルジョアジーの助手だと呼んでいる一節を削除することである。こういう言い方は、「がちょう」という言葉をつかうようなものである。われわれが別の場所で千度も罵倒しており、今後も罵倒するであろう卑劣漢たちを、いま一度余分に罵倒するという満足感を得るために、巨大な重要性をもつ実践的事業をぶちこわす危険をおかすというのは、まったく分別を欠いたやり方である。統一戦線戦術はわれわれが第二および第二半インタナショナルの指導者たちを打ち倒すたすけになるのだということを理解していない人間が、いまなお拡大執行委員会の会議にいるのだとすれば、そういう連中のために、平易な講義や講演を追加してうんと聞かせてやらなければなるまい。たぶん、彼らのためにとくに平易な小冊子を書き、たとえばフランス人がまだマルクス主義的戦術のみこんでいないようなら、それをフランス語で出版することが必要であろう。最後に、あしたになればその小児病がなおるにきまっている数人の政治的幼児のために、重要な実践的事業をだいなしにする危険をおかすよりは、この決議を全員一致ではなく、多数決によって採択するほうがましである（反対投票者には、われわれはあとで特別の、詳細な常識教育をほどこすことにしよう）。注) ……………は青山の略

レーニン

* コミンテルン執行委員会拡大総会は、1922年2月21日ー3月4日、モスクワでひらかれ、36カ国から105名の代表が参加した。総会の中心的な問題は、統一戦線戦術の問題であった。それ以外に、各国支部の状態について報告があった。総会は、戦争と戦争の危険に反対する闘争についてのテーゼ、新経済政策についてのテーゼ、統一戦線戦術についての決定、三つのインタナショナルの会議へのコミンテルンの参加についての決議その他を採択した。

レーニンは、病気のため総会に出席しなかったが、総会の準備に積極的にくわり、三つのインタナショナル会議でのコミンテルン代表団の戦術を作成した。

ここに発表するレーニンの提案は、1922年2月23日、党政治局で採択された。

三つのインタナショナル会議に参加することについての決議は、1922年3月4日、総会で採択された。

第42巻『三つのインタナショナルの会議への参加についての手紙』P553～554

1922年2月23日に電話で口述、秘書の控え（タイプしたもの）によって印刷

〈目的に即した戦術を取ること〉

ジェノヴァにおけるソヴェト代表団の任務についてのロシア共産党(ボ)
中央委員会の決定草案

政治局員だけの回覧のために中央委員会の決定草案

一 中央委員会は、情勢と任務（ジェノヴァにおけるわれわれの代表団の）について同志リトヴィーノフのテーゼにあたえられている評価を正しいものとみとめる。

………

五 われわれが自分のプログラムを説明するのを、ブルジョアが妨げようと試みる可能性があることを考慮して、最初の演説のさいにこのプログラムを説明しないまでも叙述あるいは指摘し、あるいはせめてその大要を示すこと（そして、すぐあとで、もっと詳しいかたちで公表すること）に、全力をそそがなければならない。

六 われわれのプログラムは、われわれの共産主義的見解を隠しはしないが、それをもっとも一般的に、簡潔に指摘するにとどめて（たとえば、副文章のかたちで）、つぎのように率直に言明することにある。すなわち、ここでわれわれの見解を説くのは不適當だとわれわれは考えている。なぜなら、われわれがここへやってきたのは、通商協定を結び、他の（ブルジョア的）陣営の平和主義的部分と協定に達するよう試みるためだからである、と。

われわれが他の陣営の平和主義的部分（あるいは、別の、とくに選んだ丁寧な呼び方）とみなし、またそう呼ばなければならないのは、第二インタナショナルや第二半インタナショナル型の、それについてはケインズ型等々の、小ブルジョア的な平和主義的および半平和主義的民主主義派である。

ブルジョア陣営のこの一翼を彼らの陣営全体から区別すること、この一翼の機嫌をとるようにつとめること、彼らとの通商協定ばかりでなく、政治的協定もまた、われわれの見地からみて許されるし、のぞましいと言明すること（資本主義が新しい制度へ平和的に進化していく少数の可能性の一つとして。共産主義者としてのわれわれは、こういう可能性をたいして信じてはいないが、その試みを援助することには賛成であり、また一強国の代表者として、自分に敵対的な他の大多数の強国に対抗して、それを援助することが自分の義務だと考えている）、これが、ジェノヴァにおけるわれわれのもっとも主要な政治的任務といわないまでも、主要な政治的任務の一つである。

ブルジョアジーの平和主義的な一翼を強化し、この一翼が選挙で勝利する可能性をすこしでも増大させるために、可能なことはなんでもやり、不可能なことでもあれこれとやること——これが第一である。第二には、ジェノヴァでわれわれに対抗して団結しているブルジョア諸国を離間すること——これが、ジェノヴァにおけるわれわれの二重の政治的任務である。共産主義的見解を説明することが任務ではけっしてないのである。

七 ………

レーニン

注) ………は青山の略

第42巻『ジェノヴァにおけるソヴェト代表団の任務についての決定草案』P555～557

1922年2月24日に執筆 手稿によって印刷